暁に発す

月田蒙斎

残月の滴露人の袂を湿す

暁風髪を吹いて秋冷を覚ゆ

忽ち驚く大蛇路に当って横たわるを

剣を抜いて斬らんと欲すれば老松の影。

【作者】月田蒙斎(一八〇七～一八六六年)(文化四　～　慶応二年)時習館訓導、儒学者、詩人。名は強、字は伯恕。通称右門のち鉄太郎と改める。蒙斎は号。肥後(熊本)現荒尾市生る。父祖は野原八幡宮司。幼時より頭脳明晰、貧困により学問が思うようにできなかった。田代是宗の塾に入り、ついで辛島塩井に従学。のち京都の千手旭山に学び山崎闇斎派の実理の学を納める。旭山に従って北陸及び江戸に遊ぶ。天保四年(一八三三)、九州に帰って島原に滞在した後、故郷に帰った。天保十二年(一八四一)藩命により郷学師となり、その後、時習館訓導に抜擢され、門下生は述べ数百人に及んだ。早くから詩名高く終生程朱学の究明に力を注いだ。詩集、随筆の著書多し。慶応二年(一八六六)熊本に於いて死亡。唐人町常在院に埋葬され、後に荒尾の月田墓地に改葬された。、

【語釈】＊残月…あけがたまで残っている月　　＊暁風…明け方に吹く風。　　＊秋冷…秋の冷やかさ。

【通釈】月がまだ西の空ある早朝に出発すれば、したたる露が袂をしっかりと濡らしている。明け方の風が髪を吹いて、ひんやりとした秋の気配が感ぜられる。ふと見れば、巨大な蛇が行くての道を遮るように横たわっているではないか、すわッと刀を抜いて躍りかかって退治しようとしたが、よくよく見れば、それは年を経た松の影であった。